

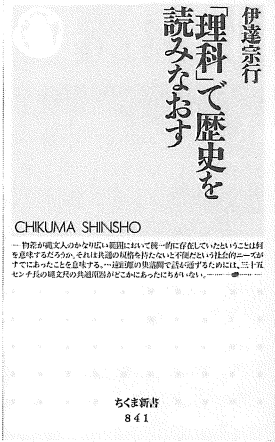
# 「理科」で歴史を 読みなおす

著者：伊達宗行

出版社：筑摩書房（ちくま新書） 定価 [820円+税]

◆推薦：牧野 剛（河合文化教育研究所 研究員）

河合塾現代文科講師。中部地区を中心に受講。河合文化教育研究所の設立時より先頭立って牽引。現在も予備校講師の代表として各方面で活躍中。



「歴史」というと、「理科」と一番遠い分野だと誰にでも思われる。〈文科と理科〉を分離し、〈日本と西洋〉、〈主観と客観〉などに二分する思考方法が「科学的」で自明なものと考えられるようになった明治以降の近代日本にあつては、「歴史」という視野に「理科」的なものが入ってこなかったのは必然であつたらう。この本の所々に、「私の知るところ、(類書は)皆無」と書かれるのも、無理はない。

しかし、時代は着実に変化した。いまや対立するかに見えた二分野さえ「コラボレート」する時代なのだ。そうした例の一つとして本書を取り上げた。この本は、著者が物理学出身の理系学者であるだけではなく、「理系的」観点から歴史に光をあてているところが際立っている。私に興味のあるその内容の一つを取り上げる。

青森の縄文式遺跡である、あの三内丸山遺跡の中心たる六本柱の構造を、著者は検討する。その柱と柱の間はどの間隔も正確に4.2mであり、1辺4.2mの正方形を二つつないだ長方形になっている(図1)。これは明らかに直角の導出技術を縄文人がもっていたことを示しており、 $3$ 対 $4$ 対 $5$ の直角三角形の辺比を利用して直角が出されたと推測される。その上で、縄文人が12進法と35cmの「縄文尺」という統一的な単位をすでに持っていたのではないかと著者は考える。3対4対5の数字の和が12であり、また35cmの12倍がこの柱の間隔の4.2mなのである。また、直角三角形の比である $3$ 対 $4$ 対 $5$ の数が、この当時の土製の人間の顔に、ドットの数で3,5,4の順で並んでいることから、それが陰暦の一年の日数=354日を示しているのではないかと推測し、ここから月の満ち欠け12回で1年とする12進法のオリエントの太陰暦法が縄文に到達していたのではないかと著者は考える。

それ以上に面白いのは、三内丸山のこの六本柱の建物は夏至の日の日の出方向に正確に向いており、もしこの六本柱の建物の三階に暗室をつくり東の側壁中央に穴を開けたなら、西の壁の中央に夏至の日の出の太陽像が映し出され、太陽の観測が可能になることである。あえて言えば「縄文天文台」(図2)である。西の壁の太陽像が夏至から毎日少しずつ動いていって365日で元に戻ることが縄文人に知られており、以上のことから縄文人は月と太陽の両方を使い、日々の生活には素朴な太陰暦を、季節を知るのには素朴な太陽暦を併用して使っていたという仮説を著者は立てるのである。

そうした異領域のコラボレートの面白さに関連するものとして、本書にはないが、銅鐸の横の二つの穴(目という)が、実は太陽の測定器ではないかという説や、瀬戸内海航路での春分の日の出の瞬間の太陽光線下に伊勢神宮があり、紀伊山脈の光の陰こそが「熊」(隈=日陰)野であるという説などもある。

こうした面白さや意外性は、歴史に対するほかの分野からの視点が入ってはじめて成り立つことであり、それが、この本の希少な価値を決定していると思われる。

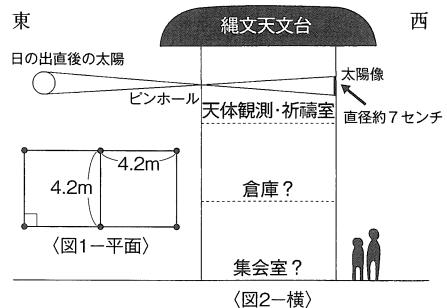


図1—三内丸山の六本柱建物とその底面寸法図  
図2—六本柱建物で夏至の太陽観測(想像図)

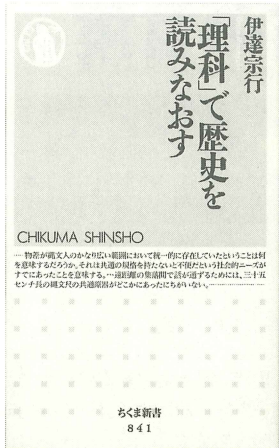
# 「理科」で歴史を 読みなおす

著者：伊達宗行

出版社：筑摩書房（ちくま新書） 定価 [820円+税]

◆推薦：牧野 剛（河合文化教育研究所 研究員）

河合塾現代文科講師。中部地区を中心に受講。河合文化教育研究所の設立時より先頭を立てて牽引。現在も予備校講師の代表として各方面で活躍中。



「歴史」というと、「理科」と一番遠い分野だと誰にでも思われる。〈文科と理科〉を分離し、〈日本と西洋〉、〈主観と客観〉などに二分する思考方法が「科学的」で自明なものと考えられるようになった明治以降の近代日本にあつては、「歴史」という視野に「理科」的なものが入ってこなかったのは必然であつたらう。この本の所々に、「私の知るところ、(類書は)皆無」と書かれるのも、無理はない。

しかし、時代は着実に変化した。いまや対立するかに見えた二分野さえ「コラボレート」する時代なのだ。そうした例の一つとして本書を取り上げた。この本は、著者が物理学出身の理系学者であるだけではなく、「理系的」観点から歴史に光をあてているところが際立っている。私に興味のあるその内容の一つを取り上げる。

青森の縄文式遺跡である、あの三内丸山遺跡の中心たる六本柱の構造を、著者は検討する。その柱と柱の間はどの間隔も正確に4.2mであり、1辺4.2mの正方形を二つつないだ長方形になっている(図1)。これは明らかに直角の導出技術を縄文人がもっていたことを示しており、 $3$ 対 $4$ 対 $5$ の直角三角形の辺比を利用して直角が出されたと推測される。その上で、縄文人が12進法と35cmの「縄文尺」という統一的な単位をすでに持っていたのではないかと著者は考える。 $3$ 対 $4$ 対 $5$ の数字の和が12であり、また35cmの12倍がこの柱の間隔の4.2mなのである。また、直角三角形の比である $3$ 対 $4$ 対 $5$ の数が、この当時の土製の人間の顔に、ドットの数で3,5,4の順で並んでいることから、それが陰暦の一年の日数=354日を示しているのではないかと推測し、ここから月の満ち欠け12回で1年とする12進法のオリエントの太陰暦法が縄文に到達していたのではないかと著者は考える。

それ以上に面白いのは、三内丸山のこの六本柱の建物は夏至の日の日の出方向に正確に向いており、もしこの六本柱の建物の三階に暗室をつくり東の側壁中央に穴を開けたなら、西の壁の中央に夏至の日の出の太陽像が映し出され、太陽の観測が可能になることである。あえて言えば「縄文天文台」(図2)である。西の壁の太陽像が夏至から毎日少しずつ動いていって365日で元に戻ることが縄文人に知られており、以上のことから縄文人は月と太陽の両方を使い、日々の生活には素朴な太陰暦を、季節を知るのには素朴な太陽暦を併用して使っていたという仮説を著者は立てるのである。

そうした異領域のコラボレートの面白さに関連するものとして、本書にはないが、銅鐸の横の二つの穴(目という)が、実は太陽の測定器ではないかという説や、瀬戸内海航路での春分の日の出の瞬間の太陽光線下に伊勢神宮があり、紀伊山脈の光の陰こそが「熊」(隈=日陰)野であるという説などもある。

こうした面白さや意外性は、歴史に対するほかの分野からの視点が入ってはじめて成り立つことであり、それが、この本の希少な価値を決定していると思われる。

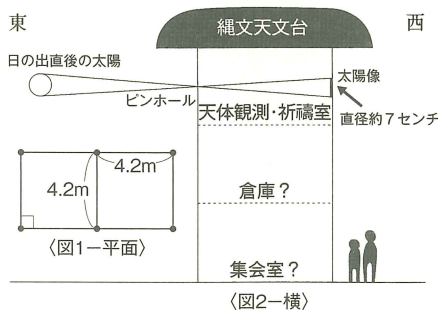


図1-三内丸山の六本柱建物とその底面寸法図

図2-六本柱建物で夏至の太陽観測(想像図)